郊外教授　写真科

年	月日	学年	備考
大正13	5・29		郊外撮影　行徳附近
14	5・14		〃　与瀬浅川附近
	6・13		野外演習　手賀沼　職員四名、生徒七名
15	2・6		〃　横浜近郊　職員三名、生徒七名
	5・4		〃　御宿　〃　〃

⑪　依嘱製作舞楽置物

大正十四、十五年度において本校は天皇皇后銀婚式祝賀の献上品の製作を各方面から依頼された。その一つである舞楽置物については左の記録がある。

兩陛下御大婚滿二十五年奉祝献上品

舞樂置物　二基

一、胡蝶樂　右部（高麗部）
一、迦陵頻　左部（唐　部）　番舞

共ニ童舞ニシテ舞者ハ四人或ハ二人ナリ　左部先ツ舞ヒテ右部答ヘ舞フ　併セテ一番ノ舞トナル　之ヲ番舞ト云フ

天冠、挿頭華ヲ戴キ「迦陵頻」ハ銅子ヲ持チ「胡蝶樂」ハ酴醾花（山吹）ヲ執ル

人物ノ高サ約八寸

舞臺ノ巾一尺六寸　奥行一尺二寸　高三寸

台　巾一尺八寸　奥行一尺四寸　高二寸五分

製作関與者

圖案	東京美術學校教授	渡邊　啓三
人物原型	東京美術學校教授	沼田勇次郎
鑄造		阿部　胤齋
彫金監督	東京美術學校教授	清水　亀藏
彫金「迦陵頻」	主作	滑川　兼彦
	助作	松原　繁信
	同	鴨　幸太郎
彫金「胡蝶樂」	主作	市島市太郎
	助作	藤本　正義
	助作	大須賀　喬
舞臺　臺及箱		
木地指物		前田　文六
塗		松波　多吉
蒔繪		松田　権六
彫刻	東京美術學校助教授	和田　季雄
金具		深瀬　嘉臣

右東京市ヨリノ依嘱ニヨリテ東京美術學校ニ於テ製作セシモノニシテ昨春嘱ヲ受クルヤ直ニ考按ヲ起シ宮内省樂部ノ好意ニヨリテ特ニ演舞ヲ請ヒ之ヲ寫シ圖構定マリ原型成リテ之ヲ鑄造シ更ニ鍛金ト彫金トノ技法ヲ加ヘテ完成セシモノ　大正十五年秋天長節前工ヲ畢ル

人物ノ顔面ハ白四分一（朧銀）頭髪ハ赤銅下着及袴等ハ純銀ニテ「迦陵頻」ノ装束ハ銅地ニ純金ノ文様象嵌「胡蝶樂」ノ方ハ

朧銀地ニ青金ノ文様象、羽翼ハ白四分一地ニ金青金赤銅等各種ノ色金ヲ以テ平、高ノ象嵌ヲ按配ス　其他天冠、挿頭華、持物等亦各宜シキニ従テ各種ノ色金ヲ以テ之ヲ作ル

⑫ 美術史研究会

大正十五年六月、美術史研究室助手青山新の届け出により美術史研究会設立に関する次の掲示が出された。当時は東洋美術史の大村西崖、田辺孝次、鎌倉芳太郎、田中豊蔵、西洋美術史の矢代幸雄、森田亀之助、板垣鷹穂、青山新等の美術史教官（外に建築史、工芸史関係教官あり）が在職し、正木直彦校長も斯学に造詣が深かった。こうした人材の充実が研究会発足の背景にあると考えられる。昭和三年創立の美術学会（357頁記事参照）はこれが土台となったのであろう。

東京美術學校美術史研究會規定

本會ハ東京美術學校生徒及出身者ニシテ美術史研究ヲ志ス者ノ爲ニソノ機関トシテ設ケタルモノナリ。

一　名稱　「東京美術學校美術史研究會」。

一　事業　會員ノ各個研究ノ指導及ソノ便宜ヲ計リ、又共同シテ研究ヲ行フモノトス。ソノ方法ヲ略々次ノ如ク定ム。

イ　例會　毎月一回例會トシテ研究會ヲ開キテ會員ノ研究發表ヲ行ヒ、本校美術史教官其他先輩ノ批評ヲ仰グコト、ス。例會ノ日時ハ第二金曜日午後六時ト定ム。

ロ　大會　一年ニ一回公開大會ヲ開キテ、ソノ年度ニ於ケル會員ノ研究成績ヲ発表ス。ソノ期日ハ十月中ニ行フコト、ス。

ハ　見學　毎學期一回實物見學ヲ行フ。即チ文庫、博物館、及個人所蔵品等ノ見學、或ハ見學旅行ノ如シ。

ニ　讀書會　毎週一回會員中ノ希望者ニテ開ク。本校美術史教官指導。

一　會費　毎月三十錢トス。

一　委員　會務ヲ擔當スル爲ニ美術史関係ノ教官及學生ノ中ヨリ委員若干名ヲ置ク。

⑬ 『文玩叢訳』

大正十四年、本校職員有志によって清福会が組織され、翌十五年一月から『文玩叢訳』の刊行が始まった。左記はその刊行予告である。

鑑賞〔文玩と改正〕叢譯の刊行

支那にては古來書畫文房器玩に關する幾多の著錄ありて、支那古美術の研究者にとりては必讀の要あるものなれども、之等の著述を讀破することは、現時の學徒にとりては西洋の圖書を渉獵するよりも寧ろ困難のことなれば、これが和譯を試みて刊行する爲め、本校有志者によりて清福會なるものを組織せられ、翻譯は大村西崖先生を煩し『鑑賞叢譯』なる叢書を發行することとなり、來る一月先づ趙希鴻〔鵠〕の洞天清祿集及び董其昌の骨董十三說を一册として刊行すべく、同書は四六判百頁内外にして、價は未定なれ